

カウツキーの進化論的社会発展論について

山口 拓美

目 次

- はじめに
- 一 ソ連崩壊の予測と唯物史観
 - 二 カウツキーによる唯物史観の新たな基礎づけ
 - 三 弁証法と有機体の発展過程
 - (一) マルクス、エンゲルスの弁証法
 - (二) カウツキーの弁証法
 - (三) レーニンの弁証法
 - 四 進化論的社会発展論と将来予測
おわりに
- はじめに

カール・カウツキーの名著『唯物史観¹⁾』は一九二七年にベルリンで出版されたが、この千八百ページに及ぶ大著は、歴史や哲学や社会科学的な考察の他にも、生物学的、動物行動学的、自然人類学的な議論が綿々と綴られ、それ

に膨大なページ数が割かれている。刊行から七十年後の現時点からみると、そうした百科事典的な記述の中でもとりわけ印象的なのは、ナチズム勃興の背景となった当時の人種理論がカウツキーによって鋭く批判されている部分である。しかし、これとほぼ同じ時期に刊行されたヒトラーの主著『我が闘争』⁽²⁾の方が、同時代に対して遥かに大きな影響力を持っていたのは言うまでもないことである。やがて、カウツキーはナチスの迫害によってオランダへの亡命を余儀なくされ、彼の思想の影響下にあったドイツとオーストリアの政治組織もナチスによって解散させられる。そして一九三八年の死とともに、カウツキーは自分自身の肉体だけでなく、その思想的生命をも失ってしまったように思われる。それは、ソ連軍によるベルリン占領の後も、もはや復活することはなかった。カウツキーは、第二インターの指導的理論家として思想史の中に登場するにすぎず、マルクス主義思想への現実的影響力を喪失してしまったのであり、とりわけ彼の主著『唯物史観』が真剣に顧みられることはほとんどなかったのである。⁽³⁾

このようなカウツキー理論の運命は、恐らく、彼がロシア革命とソ連の共産主義を執拗に否定し続けたことと深くかかわっている。よく知られているように、彼は、一九一八年に『プロレタリアート独裁』を出版してポリシェビキの試みを批判して以来、終生一貫してソ連の崩壊を予言し続けた。⁽⁴⁾このため、マルクスレーニン主義の側から「背教者」「裏切り者」として断罪されたことは当然としても、ソ連が社会主義国としての権威と政治力を持ち続けていたかぎり、一般的にもカウツキー理論の正当性が否定されてきたことはある意味で当然の成り行きであったといえる。

しかし、一九八〇年代以降ソ連東欧で起こった一連の出来事は、必然的にカウツキーに対する従来の評価を大きく変更せざるをえなくするような状況をもたらしていると思われる。⁽⁵⁾すなわち、これまで評価されることの少なかったカウツキーの議論は、少なくとも次のような点において、今や看過しえないものとなっていると考えられるのである。

まず第一に、ソ連論においてそうである。一九九一年のソ連崩壊を受けて、旧ソ連の政治経済体制の性格をどのよ

うに規定するののかという議論が繰り広げられてきたが、その際、十月革命以来一貫してソ連の崩壊を予測し続けたカウツキーの議論は、決して無視することのできない重みを持っている、といわざるをえない。

第二に、経済学の方法論において。従来のマルクス経済学の方法論は、その多くが、レーニンの帝国主義論とソ連の現存という事実⁽⁶⁾に依拠していた。そのため、ソ連の崩壊とレーニンの權威の失墜は、伝統的な経済学の方法に混乱をもたらすことになり、新しい方法論の構築が必要とされるようになった。⁽⁷⁾ その際、それに基づいてソ連の崩壊を予測したカウツキーの方法は、かかる作業に対して何らかの示唆を与えてくれるものと考えられる。

カウツキーの『唯物史観』は、それが彼の主著であるにもかかわらず、これまで注目されることの少なかった文献である。しかし、レーニン主義の失敗が明らかになった今日、最大のレーニン主義批判者であった彼の思想を無視することはできなくなっている。カウツキーはマルクス主義者として十分に長生きしたので、彼の思想の全体像を把握することは容易にはできないことであるが、彼の思想の核心的部分は主著である『唯物史観』の中にまとめられているとみてよい。そこで、本稿では、この主著で定式化されているカウツキーの根本思想を取り上げ、右に記した二点との関連で、社会発展の分析論としてのその今日的意義を検討すること、これを課題としたい。

一 ソ連崩壊の予測と唯物史観

ソ連の生成と崩壊は、二十世紀に起った最大級の出来事の一つである。したがって、ソ連の政治経済体制の性格規定をめぐる問題も、極めて重要な課題の一つに属するとみなしてよいと思われるが、その際、九〇年代に入ってからソ連論の中で大きなシェアを占めるものに、「ソ連はマルクスの理論に基づいて成立した社会主義体制ではなかった」と結論する諸学説がある。この結論は、それがソ連を資本主義と規定するものであろうと、社会主義と規定する

ものであると、あるいはそのどちらでもない主張するものであろうと、⁽⁸⁾ いずれの学説にも共通している。これらの諸学説は、それぞれ重要な考察を含んでおり、理論的貢献度の点で高いものであるといえるが、しかし基本的にはどれもみな結果論であり、なかにはソ連崩壊後に自らの結論を一八〇度変えたものもある。これに対してカウツキーのソ連論は、ソ連生成の同時代の中で主張され、しかも、遅ればせながらとはいえ、崩壊の予測的中したことによって異彩を放っている。彼は、『唯物史観』の「社会主義への道」と題する章の中で次のように述べている。

「東洋的専制政治が行われている地域の政治状況は、ロシアで見られるように、プロレタリアートに、同一の農工人口比のもとでの西洋においてよりも、より大きな力を与える。かかる状況は、プロレタリアートを、与えられた諸関係のもとで十分に達成可能になりかつ不可避になる民主主義の実現の努力のほかにも、高度に発展した資本主義的産業と高度に成熟したプロレタリアート——民主主義と自由な大衆組織を通じた長年にわたる教育訓練の中で、産業の発展が遅れた専制政治下のプロレタリアートには到達し得ない一つの段階にまで高まったプロレタリアート——を前提とするような課題にも着手するよう駆り立てる。この状況は、別の要因によって更に複雑なものになる。西洋の革命の歴史をよく知っている東洋の知識人は、一方で、自分自身の革命の中に軽々しく西洋の革命の単なる継続のみを見て、一七九三年の国民公会や一八七一年のパリコミューンを手本にしようとし、彼ら自身の革命の特性に対する見方を濁らせてしまう。だが、他方で、これらの知識人は、西欧の社会主義理論によって説得されてもいる。東洋の国でプロレタリアートが権力の座に就くと、この種の知識人は、経済的に進んだ西洋がまだほとんど糸口をつかんでいない社会主義的生産を即座に組織するために、この権力を用いるべきであると感じる。そのとき彼らは、プロレタリアートに模範と道標を示しているのだと思ってしまう。自分たちの力を越えたこの努力のもとで、プロレタリアートは難破することになり、戦い取った民主主義的自由を、新しい専制政治の中に、プロレタリアートが連帯したと

思った知識人たちによる独裁指導下の官僚的・軍事的専制政治の中に、再び失うことになる。……今日、近代国家は高度に發展した産業を絶対に必要としている……。ロシアもどんなことがあっても自国の産業をさらに發展させなければならぬ。それに成功するならば、それとともに、産業の發展になくはならない民主主義とプロレタリアートの力と自立性も成長する。産業の振興に成功しなければ、国家の全般的没落を招いた体制は、あらゆる社會悪の創造者として現れる。この国は、独裁体制が生き延び得ない破局へと向かって近づきつつある。その場合にも、民主主義は再び前面に出てこなければならぬ。もちろん、産業資本主義も同様に」⁽⁹⁾

カウツキーがこのような見通しを述べてから六十年ないし七十年後に、ゴルバチョフ政権は自国の經濟的停滯に対応し、共産党独裁体制下で民主化と資本主義化に着手したが、これらは体制的限界を越えて突き進んだ。ソ連における事態のかかる推移は、ポリシェビズムに対するカウツキーの批判と予測の基本的な正しさを裏付けている、といえる。

ところで、カウツキーによるソ連の政治經濟体制崩壊の予測は、マルクスの唯物史觀を土台に据えることによってなされたものである。カウツキーは、同じ章の中で、社會主義へと至る道が各国の歴史的文化的狀況に応じて多様でありうることを中国やメキシコ等の国々の現実に即して述べた後で、次のように結論している。

「だが、産業資本の支配する様々な地域のプロレタリアートがとる権力への道がどれほど多様なものになろうと、彼らを導いて行く目標は、産業資本とその經濟的運動法則がどこでも同一であるのと同じように、どこでも同一である。『産業の發展した国はそれほど發展していない国に対してただそれ自身の未来の姿を示すだけである』という『資本論』第一版序文のマルクスの命題は、依然として生きている。また、同序文からの次の命題も同じく依然として有効である。『一社會は、自然に則した發展諸段階を跳び越えることも法令で取り除くこともできない。しかし、その社會

は、産みの苦しみを短縮し和らげることではできない』といってもそれは『もしその社会が、社会の運動の自然法則への手がかりをつかんだなら』であるが。中世のキリスト教社会においてすべての道がローマに通じていたとすれば、今日、プロレタリアートのすべての道は、民主主義へ、そして民主主義的社会主義へと通じている⁽¹⁰⁾」

だが、カウツキーは、マルクスとエンゲルスの唯物史観をすべて鵜呑みにし、それを构子定規に現実分析へと適用したわけではなかった。特に『唯物史観』には、マルクスとエンゲルスの学説に対する批判、とりわけエンゲルスに対する批判が数多く見られる。カウツキーは、十月革命とソ連の社会主義に対する評価においても、最終的には自身の唯物史観に従ったのだと思われる。そこで、次にカウツキー的唯物史観の骨子を明示してみることにはしたい。

二 カウツキーによる唯物史観の新たな基礎づけ

カウツキーの『唯物史観』は、自然と社会を包括的に考察した大作であり、そこで論述された思想をすべて取り上げることはもちろんできない。ここで考察対象とするのは、カウツキーが自分自身成し遂げたと考え、また私もそのように考えるところの、唯物史観に対する彼の一つの貢献である。彼は、「唯物史観の更なる発展」と題する章の中で次のように述べている。

「われわれマルクス主義者が今日唯物史観に関してなにもまして専念すべきことは、その対象領域の拡張である。……エンゲルスの『家族の起源』についての小品は、われわれが一人の師から受け継いだ歴史観を拡張すべき道を教示してくれるところの遺言状として残されている。この道を私はここで進んでみた。その際、私は唯物史観の対象領域を非常に大きく広げようと努めたため、生物学の領域と接触することになった。私は、人間社会の発展が動植物の種の発展と内的に関連していないかどうか、そのため人類史は、生きた自然の一般法則と関連するがしかも特有の法

則を持つところの、生物史の一特殊ケースにすぎないのかどうかを研究した⁽¹¹⁾」

つまり、カウツキーの主たる研究領域は唯物史観と生物学の接点にあり、唯物史観を生物学的に新たに基礎づけることが、彼の主たる研究課題だったのである。

マルクス経済学と生物学的なものとの親和性は、すでにマルクスにおいて見られる。このことを示す最も著名な場所は、『資本論』第一巻第二版後記であろう。そこでは、以前の経済学者たちとは異なってマルクスが物理学や化学ではなく生物学に範をとったという趣旨の批評家のコメントが引用され、それが強く肯定されている⁽¹²⁾。また同書第一版序文には、社会を有機体とみなし、社会の発展を自然史的過程と考えるのが自分の立場だ⁽¹³⁾、と明記されており、『経済学批判要綱』でも、有機体の類比が効果的に用いられている⁽¹⁴⁾。この点で、『経済学批判』序言の建築物の比喩は、むしろ極めて異例な取り扱いであるといえる。マルクスは、社会を有機体とみなしたのであって、人間が勝手に建てたり壊したりできるような建築物とみなしたのではないことは、ここで改めて論じるまでもないことであろう⁽¹⁵⁾。

カウツキーは、このような道の中で、マルクス経済学を一步進めようとした。そして、次のような結論に到達した。「私は、動植物と同様に人間の発展を支配する共通の法則を、次のことの中に見出したと信じる。すなわち、種の変化と同様に社会のどんな変化も環境のある変化に帰せられる、ということに。環境が同じままにとどまるところでは、有機体と組織も変化しない。有機体と社会組織の新しい形態は、ある変化した環境への適応によって生じるのである⁽¹⁶⁾」カウツキーの一つの重要な貢献は、唯物史観における社会発展論に関するものであり、これを右に見られるように、変化する環境への適応として定式化したことにある。私は、カウツキーのこの一步は、マルクス経済学にとって有意義なものであったと考える。だが、その理由を述べる前に、カウツキーの社会発展論をいま少し立ち入って見ておかなければならない。

カウツキーによれば、有機体の発展は一つの問題解決過程と考えることができる。植物や動物の種は、変化した環境への適応として進化するが、このことは、次のように言い換えられる。すなわち、種は環境から提出された問題を自分自身の器官を変えることによって解決する、と。同様のことは人間社会についてもいえる。だが、人間社会の場合、ここに新しい要素が加わる。それは、人間社会は環境が提出する問題を人工的器官を作り出すことによって解決する、ということである。ここで人工的器官とは人間社会が一定の問題を解決するために作り出すあらゆる手段のことであり、「道具、武器、器具のみでなく、方法、社会組織、および規則」⁽¹⁷⁾等を指す。その際、この人工的器官は、動物の諸器官や人間自身の身体とは異なって、自明のことではあるが、しかし極めて重要な次のような特徴を持つ。

それは、人工的器官が人間の外部に存在している、ということである。このことは、人工的器官が人間の環境にもなる、ということの意味する。すなわち、人工的器官は環境が提出した問題を解決するために人間によって作り出されたものであるが、それがいったん導入され、人間社会が環境に適応するようになると同時に、それは人間たちを取り巻く環境の新しい構成要素ともなる。つまり、ここに新しい環境が出現するのである。そして、新しい環境は、遅かれ早かれ人間社会に対して再び新しい問題を提出するようになる。この新しい問題を解決するために、人間社会はまた新しい人工的器官を作り出す。かくして、人間を取り巻く環境はますます人工的環境になって行き、それとともに社会が発展して行く。つまり、社会発展は、社会と環境との相互作用によってもたらされるのである。

以上がカウツキーによる唯物史観の基礎づけの要点であるが、⁽¹⁸⁾ここで彼が特に強調するのは、新技術によってもたらされる意図せざる帰結である。

「われわれは科学において、その時までには予想もなかった新しい諸問題を投げかけないような問題の解決はほとんど行われぬ、ということを見る。そのように、これまでの歴史において、ほとんどすべての技術的または経済的

新装置が、その創造者によって意図された作用のほかに、たとえ即座にはなく時の経過の中ではあるにせよ、新しい社会的諸問題を生み出すところの意図されなかった作用を招来したのである⁽¹⁹⁾」

この新しい問題は、まったく予期されずに出現したものである故に、新しいものであり、思想や科学や経済に新しい動きを与えることになる。ここからは、未来をすべて予測することは永遠に不可能である、という結論が導き出される。この立場からカウツキーは、エンゲルスの「人間は完全に意識して自己の歴史を作りうる」ようになるという「自由の王国」についての議論を批判している⁽²⁰⁾。

カウツキーの以上のような社会発展論は、マルクス経済学の道具立ての一つとして一定の役割を果たしうると思われる。以下、その点を検討して行きたい。

三 弁証法と有機体の発展過程

(一) マルクス、エンゲルスの弁証法

資本主義社会を「生きて発展しつつある有機体」とみなす点では、ベルンシュタインもカウツキーもレーニンも共通の認識を持っていた⁽²¹⁾。また、弁証法を、かかる有機体の発展を論理的に記述する方法とみなす点でも、少なくとも後二者は共通の認識を持っていたと考えるよと思われる。だが、ここで問題となるのは、有機体の発展とはそもそもいかなる現象を指すものなのか、という点である。

有機体の発展には、次の二つの側面がある。一つは個体の発展すなわち個体発生であり、もう一つは種の進化すなわち系統発生である。個体発生が系統発生を繰り返すか否かは別として、ここで大事なのは両者の区別である。この両者は、まったく異なった原理によって発展する。すなわち、前者が受精卵の中にすでに存在する遺伝暗号の実現過

程であるのに対し、後者は偶発的に変化する環境への適応の結果としての発展である。マルクス経済学が用いる弁証法は、このどちらの現象に適用しうる方法なのであろうか。この問題は、以下において見るように、社会構成体の移行を考察する際に重要な意味を持つ。

周知のように、マルクスは「弁証法はヘーゲルにあってはさか立ちしている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならぬ⁽²²⁾」と述べ、脱神秘化された弁証法を『資本論』で用いたが、弁証法の手引きのようなものを希望に反して書き残せなかったため、その後のマルクス主義者たちは、結局ヘーゲルの『論理学』によって弁証法を勉強することになった。「ヘーゲルの『論理学』の全体をよく研究し理解しなければ、マルクスの『資本論』、特にその第一章を理解することはできない。だから、マルクス主義者のうち誰も、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかったのだ⁽²³⁾」というレーニンのアフォリズムはあまりにも有名である。しかし、社会科学が経験科学である以上、その方法の修得を専ら思弁哲学の中にのみ求めるのはあまりにも危険である。むしろそれを自然科学の中に、マルクスが示唆したように、まず生物学の中に求めるのが近道であるように思われる。

そこでもう一度、マルクスが『資本論』第一巻第二版後記に引用し、「彼の描いたものは、弁証法的方法以外のなんであろうか⁽²⁴⁾」とコメントしたところのカウフマンの論評を見てみよう。引用文の終結部には次の一文が置かれている。

「このような研究の科学的価値は、ある一つの与えられた社会有機体の発生・現存・発展・死滅を規制し、またそれと他のより高い社会有機体との交替を規制する特殊な諸法則を説明することにある⁽²⁵⁾」

ここで、個体発生という言葉を、受精卵から胚発生を経て成体に至る一連の過程だけでなく、さらに成年期から老年期へと続き、最後に死によって終わる個体の全生活史として解するとすれば⁽²⁶⁾、右引用文の前半部分は、明らかに個体発生に対応するものであるとみなすことができる。これに対して、後半部分は系統発生すなわち種の進化に対応す

るものであるようにも見え、そうでないようにも見える。

次に、カウフマンからの右引用文に対応すると思われるマルクス自身の叙述を見てみよう。それは、『資本論』の中でも有名な次の部分である。

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、それゆえ資本主義的な私的所有は、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の最初の否定である。しかし資本主義的生産は、自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である」⁽²⁷⁾

ここに見られる否定の否定は、「資本主義的生産」が「自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を」生み出す、とされていることから、外的環境に対する適応としての進化ではなく、個体発生的な発展であると思われる。エンゲルスは、マルクスのこの命題を『反デューリング論』第一篇の「弁証法。否定の否定」と題する章で次のような例を用いて解説している。

「この恐るべき否定の否定とは、いったいなんであろうか?……大麦の粒をとってみよう。……もしこのような大麦の一粒が、それにとって正常な条件に出会えば……特有の変化がそれに起こる、つまり発芽する。麦粒はそれとしては消滅し、否定され、それに代わって、その麦粒から生じた植物、麦粒の否定が現われる。だが、この植物の正常な生涯とはどういうものか?それは生長し、花をひらき、受精し、最後にふたたび大麦粒を生じる。そして、その大麦粒が熟するというと、たちまち茎は死滅し、こんどはそれが否定される。こういう否定の否定の結果として、ふたたびはじめの大麦粒が得られるが、しかし、一粒ではなくて、一〇倍、二〇倍、三〇倍の数で得られる。穀物の種はごく徐々にしか変化しないから、今日の大麦は一〇〇年まえのそれとほとんど同じである。だが、改良性に富む観賞植物、たとえばダリアか蘭をとってみよう。もしわれわれが種子とそれから生じる植物とを園芸家の技術によって処理

するなら、この否定の否定の結果として、より多くの種子が得られるだけでなく、またより美しい花を咲かせる、質的に改良された種子が得られる。そして、この過程が繰り返えされるたびに、つまり新しい否定の否定のたびに、この完成化が高まってゆくのである。——大部分の昆虫、たとえば蝶でも、この過程は大麦粒の場合と同じようにおこなわれる。蝶は、卵から、卵の否定によって生まれ、そのいろいろな変態を経過して性的成熟に達し、交尾し、そして交尾過程が完了し、雌が多くの卵を生むとすぐ死ぬことによって、ふたたび否定される。……ここではただ、否定の否定が生物界の二つの界域で現実におこなわれているということを、指摘しさえすればよいのである⁽²⁸⁾」

ここに見られる否定の否定は、明らかに、環境への適応としての進化ではなく、個体発生としての発展のことである。すなわち、大麦の例では種子から種子へという個体の生活環が、蝶の例でも卵から卵へという個体の生活環が否定の否定の過程として取り上げられている。両者の間に挿入された観賞植物の例では、人為淘汰による品種改良が取り上げられているが、しかしここでも否定の否定はあくまで個体の生活環を指しているものであり、園芸家がかかる否定の否定の過程を繰り返す際に特別の技術を用いることが言われているにすぎない。つまり、エンゲルスにとって否定の否定の弁証法は、生物の世界では、なによりもまず個体発生において見られる過程なのである。

さて、以上のことから、少なくとも次のような結論が得られる。すなわち、マルクスとエンゲルスも有機体の発展を弁証法的過程とみなしたが、その際有機体の発展とは主として個体の発生であること、そして社会有機体も生物個体と同じように弁証法的過程として発展すると考えたこと、これである。

だが、遺伝子すなわち予め決定された設計図の実現過程である個体発生と多数の人間個体から成る社会の発展とを、同じような弁証法的過程として処理することは、方法的に正しい取り扱いといえるのだろうか。

『唯物史観』におけるカウツキーの主張の独自性は、この点に関するものであった。すなわち、彼は弁証法をマルク

ス、エンゲルスとは異なった仕方では理解し、本稿の用語法でいえば、個体発生は弁証法的には進行しないが、種の進化と社会の発展は弁証法的に進行すると主張したのである。

(二) カウツキーの弁証法

ここで、カウツキーの弁証法とは、前項で見た彼自身の社会発展論に対して次のような弁証法的表現を付与したものである。すなわち、有機体の発展は弁証法的過程であるが、その際、テーゼにあたるのが有機体であり、アンチテーゼが環境であり、適応がジンテーゼである。有機体は変化した環境によって否定されるが、その否定を否定することによって生き延びる、すなわち適応する、というわけである。⁽²⁹⁾ このような弁証法は、エンゲルスのものとは異なっている。この点をカウツキーは次のように述べている。

「エンゲルスにおいては、運動と発展は、個体と環境という二つの要素の相互作用としてではなく、単に個体という一つの要素のそれ自身からの運動として見られ、テーゼと同じくアンチテーゼも同一の個体の中に求められている。ここには、運動を同じく唯一の要素から、自己の中から自己自身の否定を生む精神からのみ説明したところのヘーゲルの原型の影響が、明らかにまだ強く残っている⁽³⁰⁾」

「ヘーゲルにおいては、テーゼとアンチテーゼは、有機体と環境として相互に作用し合う互いにまったく異なった事物であるのではなく、彼においては、テーゼの中にすでに自己自身との矛盾が、テーゼの否定が潜んでいる。この否定は成長し、ついにはテーゼの止揚に、プロセスの出発点の止揚に至る。だが、この否定も、またもや自己の中に自己自身の否定の胚芽を持っていて、ついにはジンテーゼへ、テーゼの更新された肯定へ、だがより高い段階へと至る。マルクスとエンゲルスは弁証法のかかる把握をヘーゲルから受け継いだ⁽³¹⁾」

有論から本質論を経て概念論へと上向するヘーゲルの論理学体系において、「発展」は概念の運動に対応するものである。「発展」をヘーゲルは個体発生を例にとって次のように説明している。

「発展は、すでに潜在していたものを顕在させるにすぎない。自然においては、概念の段階に相当するものは、有機的生命である。かくして例えば、植物は胚から発展する。胚はそのうちにすでに植物全体を含んでいる。といっても、それは観念的に含んでいるのであって、したがってその発展は、植物の諸部分である根や茎や葉などが、非常に小さい形ではあるが実在的に、胚のうちに存在している、という風に解されてはならない。これはいわゆる『箱詰めの仮説』であって、その欠陥は、観念的にのみ存在しているものを、すでに現存在しているものとみるところにある。

他方この仮説の正しい点は、概念がその過程において自分自身のもとにとどまり、過程は内容上なんらの新しいものをも定立せず、ただ形式上の変化をひき起すにすぎないということである⁽³²⁾」

見られるように、ヘーゲルの「発展」とは、有機的世界においては、個体発生のことを指す。それは、潜在的なものの顕在化という「発展」の内容からして、個体発生以外のものではありえない。カウツキーが指摘するように、マルクスとエンゲルスは、ヘーゲルからこのような「発展」の把握を継承したものと思われる。マルクスはダーウィンの『種の起源』をよく読んでおり、エンゲルスにいたってはダーウィンの業績と対比させることによってマルクスのそれを讃えさせたのだが、それにもかかわらずダーウィンの進化論は彼らにとってヘーゲルの弁証法以上のものはなかったのである。

ヘーゲルは、当然のことながら、ダーウィン以来の進化論を未だ知らなかった。マルクスとエンゲルスは、ダーウィンの理論を知る前に、ヘーゲルから弁証法を受け継ぎ、これを用いて唯物史観を作り上げた。そして、個体発生と社会発展を同一の弁証法的過程として把握するという誤りを犯した。だが、本来は、種の進化と社会発展とを同一の弁証

法的過程として把握すべきであった。なぜなら、潜在的なものを顕在化させるにすぎない個体発生に対して、種の進化と社会の発展においてはそれ以前には存在していなかった新しいものが生じるからである。これが、カウツキーの主たる論点である、といえる。

弁証法をカウツキーのように捉えなおすが、弁証法にとって正しいことなのか否かは、疑問の残るところである。むしろカウツキーは、自分自身の発展論に対してあえて弁証法的表現を付与する必要はなかったように思われる。だが、社会の発展を個体発生の類比で考えてはならず、むしろ進化論的に考えるべきである、というカウツキーの指摘は、正しいものであった、といわなければならぬ。というのも、社会を個体発生になぞらえることの不適切性は、レーニン主義の失敗によって裏付けられたといえるからである。

(三) レーニンの弁証法

周知のように、レーニンは『帝国主義論』を書く前に、ヘーゲル哲学を熱心に研究した。その結果、レーニンはマルクス、エンゲルスと同じ道を歩むことになった。すなわち、レーニンは資本主義社会の発展を生物個体の生活史になぞらえて定式化したのである。この点で、レーニンはマルクス、エンゲルスの方法をそのまま継承したのだといえる。だが、その帰結は不幸なものであったといわざるをえない。

レーニンの『帝国主義論』によれば、資本主義は段階的に発展しているが、帝国主義はかかる発展段階において最も重要な位置を占める一段階である。

「帝国主義は、資本主義一般の基本的諸属性の発展と直接の継続として生じた。だが、資本主義は、その発展の一定の、きわめて高度の段階で、すなわち資本主義の若干の基本的属性がその対立物に転化しはじめたときに、資本主義

からより高度の社会Ⅱ経済制度への過渡時代の諸特徴があらゆる方面にわたって形づくられ、あらわになったときに、はじめて資本主義的帝国主義となったのである。……もし帝国主義のできるだけ簡単な定義をあたえることが必要だとすれば、帝国主義とは資本主義の独占的段階であるというべきであろう⁽³³⁾」

帝国主義が発展しつつある資本主義の一段階だとする規定は、帝国主義を資本主義の段階と解すべきではないというカウツキーの見解を批判しながら主張されたものであるだけに、レーニンにとって重要な論点であったと考えられる。そして、この段階が独占段階であるとされたことによって、そこから次のような性格が導き出された。

「この独占は、他のすべての独占と同様に、不可避免的に停滞と腐朽化への傾向をうみだす⁽³⁴⁾」
かくして、レーニンは結論する。

「帝国主義は過渡的な資本主義として、あるいはもっと正確に言えば、死滅しつつある資本主義として、特徴づけなければならぬ⁽³⁵⁾」

ここに、「社会有機体の発生・現存・発展・死滅」という『資本論』第一巻第二版後記に記された文言への直接的な対応物があるといえる。「死滅しつつある資本主義」そして「停滞と腐朽化」というレーニンの規定は、二十世紀のマルクス経済学界のなかで極めて大きな影響力を持つことになった。ここでは戦後の先進資本主義国の高度成長も、「停滞と腐朽化」の概念によって解釈され、至る所に資本主義の死滅の徴候が見出された⁽³⁶⁾。かかる事態の背景にあったのは、なによりもソビエト社会主義共和国連邦の現存である。そして、ソ連の社会主義性を理論的に支えたものも、レーニンの個体発生論的發展段階説である。物質的条件を欠いた後進国で社会主義的生産様式を建設するという非マルクスの行為も、資本主義の發展段階説によって正当化された。「マルクスとエンゲルスが活躍したのは、発達した帝国主義がまだなかった⁽³⁷⁾」時代のことであり、帝国主義段階では事情が異なる、というわけである。帝国主義段階では、

「個々の国と個々の国民経済とは、自足的な一単位であることをやめて、世界経済とよばれる一つの鎖の環に転化した」⁽³⁸⁾ため、プロレタリア革命も、先進資本主義国ではなく、この鎖の最も弱い場所で勃発する、ということになったのである。ソ連が社会主義国としての権威を持っていたかぎりには、「死滅しつつある資本主義」という理論に導かれた革命の勝利は、この理論の実証でもあるように思われた。

だが、資本主義社会全体に対して、生物個体に必ず訪れるところの死滅段階を、同じように予定的に割り当てることが、果たして可能なのだろうか。

その不可能性を、図らずも実証してしまったのがレーニン主義の失敗であるといえる。カウツキーが強調するように、社会の発展過程においては、予期し得なかった新しい問題が次々に発生する。これらの問題を解決することで、社会の姿は大きく変化する。そして、その変化過程は、個体発生上の予測可能な段階的变化とは著しく異なったものとなる。むしろ、その変化は、種の進化に似ているといえる。現在生きている種が、将来いかなる姿に変化するかは、予め決定されてはいないのであり、またかかる変化がいつ起こるのかは、個体発生的に予定されてはいないのである。それでは、カウツキーのソ連崩壊の予測はどうなのであろうか。彼は、自分自身の主張に反して、生まれたばかりのソ連社会に死滅の段階を割り当てたことになるのではないか。次にこの問題を検討しなければならない。

四 進化論的社會發展論と将来予測

マルクス経済学にとって、社会の将来を展望してみせることは、重要な作業の一つに属する。それ故、カウツキーも『唯物史観』の膨大な論述を将来展望によって締めくくっている。本稿では、彼の未来予測の詳しい内容にまで立ち入ることはできない。ここで取り上げなければならないのは、どのようにして社会の未来の予測が可能なのか、と

いう点である。この問題は、彼の根本思想に属する事柄でもある。

彼の思想の中心は、社会の発展を、有機体の進化と同様に、一つの問題解決過程として把握することにあつた。彼の考えでは、未来予測のあり方も、まずこの構造によって大枠が与えられている。すなわち、社会発展の領域において予測しうるのは、環境によって課せられた現在の問題に対する将来の解決、これのみである。しかも、その場合、問題解決のための手段と能力がすでに存在していなければならない。そうした場合にだけ、意図された解決だけを予測しうるのであり、この問題解決に伴って生ずるすべての帰結までは、予測することができない⁽³⁹⁾。多くの場合、意図せざる帰結が付随し、新しい問題を提出することになる、ということはずで見えた。

以上の点をおさえたとえ、もう少し立ち入って、彼の未来予測に関する見解を見ていこう。彼は、『唯物史観』の最終篇で予測についての一般論を展開している⁽⁴⁰⁾。そこでは、予測の種類が三つに分類されているが、その中で社会発展に関係するものは、彼のいうところの第三の予測である。それは、次のようなものである。

まず、予測を立てる際の材料は、過去から現在までの間に出現した経験的事実であり、それ以外の何ものでもない。もし過去から現在までの間に一定の事象が同一の仕方で繰り返されているならば、その事象が将来再出現することは容易に予測できる。だが、同一事象の反復の中にも小さな偏倚が常に生じる。もしこの偏倚がいつも同じ方向に現れれば、その偏倚はますます大きくなる。このような仕方で同一の事象が絶え間なく反復されれば、この運動は発展過程の性格を身につけるようになる。だから、この運動を十分な期間にわたって観察できれば、かかる発展の方向性を予測することができ、また、それがもたらすであろう現象も予測することができる。カウツキーは、これの例として、年平均気温の長期的低下を取り上げ、それが最終的には氷河期という現象をもたらすことになる⁽⁴¹⁾と述べている。現代のわれわれに馴染み深いのは、もちろん地球温暖化の方である。今日では温暖化の結果として海水面の上昇や生態系

の変化等が生じるであろうといわれている。そして、彼の見解によると、マルクスの予測もこれと同種のものである。

人間社会において常に繰り返されている事象は、主として経済の領域に見出される。生産活動が、再生産として常に反復されていなければ、社会は存続しえない。しかも、資本主義的生産過程は拡大再生産過程である。カウツキーによれば、ここからマルクスの予測が始まる。資本主義的拡大再生産過程においては、次の二つの傾向が見られる。資本の絶え間ない蓄積と技術の進歩がそれである。資本の蓄積によって労働者の数が増大する。一方、技術進歩は労働者への生産物の分け前を低下させ、搾取を強める。かくして資本と労働との階級対立が増大する。

「この予測は、われわれが常に見て取ることのできる日常的な諸事象の反復の上に立てられている。資本の蓄積、プロレタリアートの増加は、日常的に繰り返されている。両者の階級対立と階級闘争は日常的に繰り返されている。階級闘争が政治闘争に、国家権力をめぐる闘争になるという経験は日常的なものである。現在のこの日常性の上に次のような未来の推論が立てられる。すなわち、プロレタリアートが国の多数となり、自分たちの解放闘争に役立てるために国家権力を勝ち取る時期が不可避免的に近づいている、という推論が⁽⁴¹⁾」

労働者階級が解決すべき問題は、階級的搾取の撤廃である⁽⁴²⁾。この問題を解決するためには、そのための手段と能力が必要である。ここでは、それに関して、労働者階級が多数派になることが述べられているが、更に本稿の第一節に引用した部分では、かかる問題解決の前提として、「高度に発展した資本主義的産業と高度に成熟したプロレタリアートの存在が挙げられていた。ところで、この部分はロシア革命とソ連の崩壊について述べられた部分でもあった。そしてこの部分で、十月革命時のロシアにはかかる前提条件が存在していなかった、とカウツキーは指摘したのである。ここで、カウツキーのソ連崩壊の予測を彼自身の予測論によって整理するとすれば、次のようなものになるう。

十月革命とその後のソ連時代においてポリシェビキが解決しようとしたのは、ロシアにおける社会主義的生産の組織、という問題であった。だが、かかる問題を解決するためには、そのための手段と能力が存在していなければならぬ。この場合それは、発達した産業資本主義の存在、多数派となり民主主義的に成熟したプロレタリアートの存在である。ロシアには未だこれらの条件が存在していない。だから、ポリシェビキが自ら立てた問題を解決するためには、社会主義的生産の即座の組織ではなく、資本主義化と民主主義化の推進が必要である。このことは、次のように言い換えることができる。すなわち、環境によって本来ロシアの労働者階級に提出されていたのは、いかにして資本主義化と民主主義化を推進するか、という問題であった、と。そして、ロシア人がこの本来の問題の解決に真剣に取り組み始めるなら、ソ連共産党の独裁体制は必然的に破局を迎えざるをえない。

結局のところ、ロシア人は先進資本主義国に倣って資本主義を発展させる道をとらざるをえない。それ故、カウツキーが本稿第一節で見たように「産業の発展した国はそれほど発展していない国に対してただそれ自身の未来の姿を示すだけである」「一社会は、自然に則した発展諸段階を跳び越えることも法令で取り除くこともできない」というマルクスの命題を今なお有効なものとして引用したのは、以上のような問題解決過程の意味合いにおいてである、といえる。つまり、マルクスの唯物史観はカウツキーによって進化論的な基礎づけにおいて用いられているのである。ソ連崩壊の予測は、生物個体の生活史になぞらえたレーニンの発展段階論によってなされたのではなく、問題解決過程としての彼の進化論的社会発展論に基づいてなされたのだ、ということが出来る。

以上、本稿が明らかにしようとするのは、ヘーゲルからマルクス、エンゲルスを経てレーニンへと受け継がれた個体発生論的社会発展論よりも、カウツキーの進化論的社会発展論の方がよりよく現実を説明した、ということである。

しかし、ここですぐに次のことに言及しておかなければならない。すなわち、右記のことがいえるのは、歴史的に実在する実際の社会の発展に関してであり、また実際の社会の将来展望に関してのみである、ということに。これに對して、経済理論を叙述するためのヘーゲルの弁証法すなわち上向法は、ソ連崩壊とは何の関係もなく、今なお有効である。『資本論』の叙述の進展は、現実の歴史過程からは区別された経済学的カテゴリーの論理的進展であり、論証過程である。これは、『資本論』の方法に関する論争で、論理説が定説になっていることが示している通りである。経験的事実から抽象によって得られた素材を論理的に再構成する場合、それが個体発生的な、必然的な叙述になることは、むしろその叙述の成功を示すことになる。だが、現実の社会発展の過程は、論理的な思考の進展とは異なるのである。マルクスはこのことを強く意識していたから、『経済学批判要綱』の序説で次のように述べた。

「ヘーゲルは、実在的なものを、自己を自己のうちに総括し、自己のうちに深化してゆき、そして自己自身から発して運動する思考の結果として把握するという幻想におちいったのであるが、しかし抽象的なものから具体的なものへ上向する方法は、具体的なものを自己のものとし、それを一つの精神的に具体的なものとして再生産するための、ただ思考にとつての方式であるにすぎない。しかしそれは、具体的なものそれ自体の成立過程ではけっしてないのである」⁽⁴³⁾

だがマルクスは資本主義的蓄積の歴史的傾向を述べた節で「資本主義的生産の否定」という将来における実在的過程を「資本主義的生産が自然過程の必然性をもってそれ自身の否定を生み出す」ところの弁証法的過程として叙述してしまっている。つまり、マルクスのあの命題は、「具体的なものそれ自体の成立過程」と「自己自身から発して運動する思考の結果」との不用意な混同であるように見えるのである。仮にこのような理解がマルクスの真意に反するものであるとしても、マルクスは別のところでそうしたように弁証法をもっと慎重に用いるべきであったと思われる。⁽⁴⁴⁾

すなわち、『資本論』における上向過程の直接の延長というふうには誤解されないような仕方、言い換えれば潜在的なものも顕在化というふうには誤解されないような仕方、現実の社会の発展方向を展望すべきであった。この点で、問題解決過程の枠組で将来展望を明示的に限定したのは、カウツキーのマルクス経済学に対する貢献である、ということが出来る。将来展望は社会的実践において不可欠の一作業であるが、カウツキーの進化論的社会発展論は、かかる作業において一定の役割を果たすことができる、と思われるのである。⁽⁴⁵⁾

おわりに

現代資本主義の歴史的過程を分析する際、これまで多くのマルクス経済学者によって用いられてきた方法は、レーニンの『帝国主義論』に由来する発展段階説であった。それは、資本主義を生物個体の生活史になぞらえ、「生成・現存・発展・死滅」の各段階を経るものとしてその歴史的過程を把握する方法である。これに対してカウツキーは、有機体の進化過程と同様に社会を問題解決過程とみなし、これによって唯物史観を新たに進化論的に基礎づけようとした。このようなカウツキーの進化論的社会発展論は、レーニン理論の大きな影響力の陰で、それほど注目されることのないままに止まってきた。しかし、ロシアにおいて共産主義から資本主義への転換が進められている今日、二〇世紀の資本主義を「死滅しつつある資本主義」と特徴づけるレーニンの発展段階説は、その正当性を主張し続けるのが困難な状況にあり、これに代わる新しい方法論の構築が必要とされるに至っている。その際、『唯物史観』にまとめられたカウツキーの見解は、資本主義の歴史的過程を分析するための一つの手がかりとして、少なくとも役割を果たし得るものと思われる。本稿では、さしあたり、その基本思想のみを再検討した。

注

- (1) Karl Kautsky, *Die materialistische Geschichtsauffassung, Erster Band: Natur und Gesellschaft, Zweiter Band: Der Staat und die Entwicklung der Menschheit*, Berlin, 1927. 日本語訳は第一巻について次のものがある。カール・カウツキー『唯
物史観』第一書精神と世界、藤井悌・佐多忠隆訳、日本評論社、一九三二年、同第二書人間性、佐多忠隆訳、一九三三年、同第
三書人間社会、佐多忠隆訳、一九三三年。また、千八百頁に及ぶオリジナルを約三分の一の長さに編集した短縮版がある。Karl
Kautsky, *Die materialistische Geschichtsauffassung, Gekürzte Ausgabe, herausgegeben, eingeleitet und annotiert von John H.*
Kautsky, Dietz, Berlin; Bonn, 1988 (Internationale Bibliothek; Band 129).
- (2) 『わが闘争』全三巻のうち第二巻は一九二七年に初版が出されている。
- (3) スティーンソン『カール・カウツキー』時永淑／河野裕康訳、法政大学出版局、一九九〇年、三四一―三四八頁、及び、前
掲 *Gekürzte Ausgabe* の John H. Kautsky の Einleitung 参照。
- (4) 山本左門『ドイツ社会民主党とカウツキー』北海道大学図書刊行会、一九八一年、第六章参照。
- (5) 例えば橋本剛氏は「従来わが国ではまとまった邦訳がなかった」カウツキーの『プロレタリアート独裁』を一九九〇年前後
に翻訳し、そのあとがきでカウツキーの正当性を指摘している。橋本剛訳「カール・カウツキー『プロレタリアートのディクタ
トゥール』(一九一八年)」北海学園大学『学園論集』、第六一号、一九八八年、同「その2」同上、第六七号、一九九〇年、同
「その2」同上、第七二号、一九九二年、参照。
- (6) 中村平八「發展途上(国型)社会主義の崩壊」神奈川大学『商経論叢』第三三卷・第二号、一九九六年、にこの議論の整理
が見られる。
- (7) 北原勇・伊藤誠・山田鋭夫『現代資本主義をどう視るか』青木書店、一九九七年、にそのような試みの幾つかが見られる。
- (8) 前掲「發展途上(国型)社会主義の崩壊」参照。
- (9) Kautsky, *Die materialistische Geschichtsauffassung, Zweiter Band*, Berlin, 1927, S. 530f. 以下同書からの引用は単に *Erster*
Band 及び *Zweiter Band* のみ記す。
- (10) *Ebd.*, S. 537f.
- (11) *Ebd.*, S. 630.
- (12) *Marx Engels Werke, Band 23*, Dietz Verlag Berlin 1962, S. 25-27.

(13) Ebd., S. 16.

(14) 例えば、次のような記述。「ここで考えておくべきことは、新しい生産諸力と生産諸関係とは、無から発展してきたものでも、絵空事や、自分自身を措定する理念の胎内から発展してきたものでもなく、生産の既存の発展と受けつがれた伝統的な所有諸関係の内部で、またそれらと対立しながら発展するものであるということである。完成したブルジョア的システムにおいては、どんな経済的關係もブルジョア経済的形態をとった他の関係を前提しており、こうしてまた、措定されたものはどれをとっても同時にまた前提でもあるとすれば、こうしたことは、すべての有機的システムについていえることである。総体性としてのこのような有機的システムそのものは、その諸前提をもっており、またその総体性への発展は、とりもなおさず社会のすべての要素を自己に服属させるか、ないしは自分にまだ欠けている器官を社会のなかからつくり出すことにはかならない。このようにして有機的システムは、歴史的に総体性になるのである。この総体性になるということが、有機的システムの過程の、その発展の一契機をなすのである」『マルクス資本論草稿集①』資本論草稿集翻訳委員会訳、大月書店、一九八一年、三三二頁。

(15) 柴田信也「経済学体系の内と外」研究年報『経済学』（東北大学）第五五巻第四号、一九九四年、馬渡尚憲『経済学のメソドロジー』日本評論社、一九九〇年、一九一―一九二頁、シュムペーター『資本主義・社会主義・民主主義（上）』中山伊知郎／東畑精一訳、東洋経済新報社、一九六二年、六一―〇九頁参照。

(16) Kautsky, *Zweiter Band*, S. 630f.

(17) Kautsky, *Erster Band*, S. 786.

(18) 以上の要約は主として以下の部分からのものである。Kautsky, *Erster Band*, Erstes Buch, Fünfter Abschnitt, Zweites Buch, Sechster Abschnitt, Drittes Buch, Dritter Abschnitt, Zweiter Band, Viertes Buch, Neunter Abschnitt.

(19) Kautsky, *Zweiter Band*, S. 634.

(20) Kautsky, *Zweiter Band*, Viertes Buch, Neunter Abschnitt, Zweites Kapitel.

(21) ヘルンシュタイン「科学的社会主義はいかにして可能か」『社会主義の諸前提と社会民主主義の任務』佐瀬昌盛訳、ダイヤモンド社、一九七四年、三二―一頁、レーニン『カール・マルクス』全集刊行委員会訳、国民文庫、大月書店、二七頁、同上『国家と革命』同上訳、同上、一〇八頁参照。

(22) マルクス『資本論第一巻a』資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、一九九七年、*Marx Engels Werke, Band23*, Dietz Verlag Berlin, 1962, S. 27.

- (23) レーニン『哲学ノート』上巻、松村一人訳、岩波文庫、一九七五年、一五五頁。
- (24) 前掲『資本論第一巻a』二八頁。Marx Engels Werke, Band 23, Dietz Verlag Berlin, 1962, S. 27.
- (25) 同上、二七頁。Ebd.
- (26) ドーキンス『遺伝子の川』垂水雄二訳、草思社、一九九五年、四五頁参照。ここでは、生涯発生という言葉が用いられている。
- (27) 『資本論第一巻』一三〇一頁。Marx Engels Werke, Band 23, Dietz Verlag Berlin, 1962, S. 791.
- (28) 『マルクス・エンゲルス全集第二〇巻』大内兵衛・細川嘉六監訳、大月書店、一九六八年、一四一―一四二頁。
- (29) Kautsky, *Erster Band*, S. 401.
- (30) Ebd., S. 132f.
- (31) Ebd., S. 130.
- (32) ヘーゲル『小論理学』松村一人訳、岩波文庫、一九七八年、二二四頁。G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke & Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main 1970, S. 308f. なお、ヘーゲルは、有機体のかかる發展が対立や妨害のないストレートな發展であるのに対して、精神の發展は自己の内部で自己自身と対立しつつ実現される自己妨害に満ちた發展であるとして両者を区別しているが、『歴史哲学講義』序論)、しかしカウツキーの視点から見ると、両者とも自己自身の内部から発する發展である点で同一であり、両者とも外的環境との相互作用ではない点で進化としての發展とは異なるのである。
- (33) レーニン『帝国主義論』宇高基輔訳、岩波文庫、一九五六年、一四四―一四五頁。
- (34) 同上、一六一頁。
- (35) 同上、二〇三―二〇四頁。
- (36) 山田鋭夫『二〇世紀資本主義』有斐閣、一九九四年、第6章、参照。
- (37) 『スターリン全集第六巻』スターリン全集刊行会訳、大月書店、一九五二年、八六頁。
- (38) 同上、一一〇頁。
- (39) Kautsky, *Zweiter Band*, S. 755f.
- (40) Ebd., S. 741-746.
- (41) Ebd., S. 753.

(42) Ebd., S. 635.

(43) 前掲『資本論草稿集①』五〇頁。

(44) 『資本論』第一巻第四篇第二三章には、より実際の歴史過程に即した次のような叙述が見られる。

「農業およびマニファクチュアの幼稚で未発展な姿態にまといついていた両産業の本源的な家族のきずなの解体は、資本主義的生産様式によって完了される。しかし、資本主義的生産様式は、同時に、農業と工業との対立的に形成された姿態を基礎とする、両者の新しいより高い総合、両者の結合の物質的諸前提をつくり出す。資本主義的生産様式は、それが大中心地に堆積させる都市人口がますます優勢になるに従って、一方では、社会の歴史的原動力を蓄積するが、他方では、人間と土地とのあいだの物質代謝を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地成分の土地への回帰を、したがって持続的な土地豊度の永久的自然条件を攪乱する。こうしてこの資本主義的生産様式は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活とを、同時に破壊する。しかしそれは同時に、あの物質代謝の単に自然発生的に生じた諸状態を破壊することを通じて、その物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また完全な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建することを強制する」(前掲邦訳書八六三—八六四頁)

ここでもマルクスは弁証法的スタイルで将来展望を記しているが、あの否定の否定の命題と比べると、ここでのそれはより慎重なものとなっている。すなわち、資本主義的生産様式は、ジンテーゼのための「物質的諸条件」を作りだし、ジンテーゼを実現することを「強制する」のであるが、ジンテーゼそのものをも必然的に生み出すとまでは、マルクスは述べていないのである。ところで、ここで「強制する」のは、誰に対してであろうか。これを社会に対して強制する、と解すれば、社会が資本主義によって変化したところの環境への適応を迫られている、ということになり、唯物史観のカウツキー的理解と一致することになる。

(45) 宇野弘蔵氏は、歴史過程の分析は『資本論』すなわち原理論では行いえないとしてこの作業を段階論と現状分析に割り当てたが、段階論の土台にレーニンの帝国主義論を据え、段階論と現状分析を資本主義の発生、発展、没落を説明するものとし、さらに現実の資本主義がすでに没落期に入っていると認識したため、氏の三段階論はソ連崩壊によって大きな打撃を受けることになった。この点に関しては、大内秀明「現代資本主義論の焦点——ソ連・東欧体制の崩壊と宇野三段階論」馬渡尚憲編集代表『現代の資本主義——構造と動態』御茶の水書房、一九九二年、四九六—五一頁参照。